

第71回「日立美術会展」を開催するにあたり、立見榮男先生から以下のような特別寄稿をいただきました。
「新たな環境や新たな人との出会いを大切にして謙虚に学びなさい」という教えかと思います。掲載します。

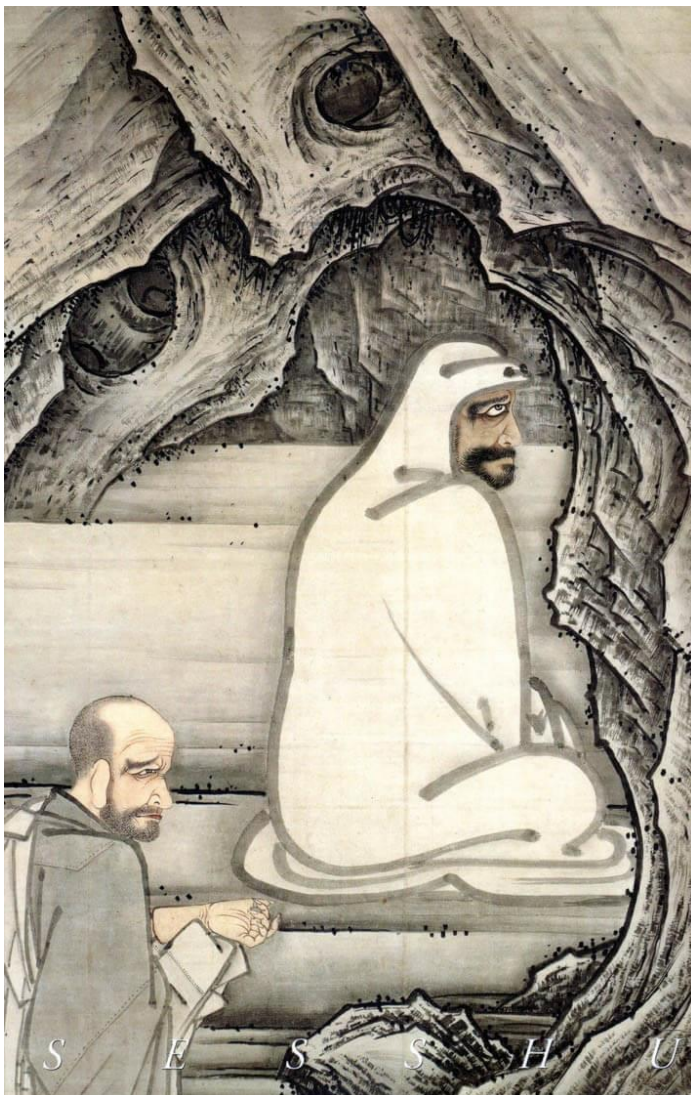
異郷異質礼讃

立見榮男

戦国の画僧・雪村周継は、常陸佐竹城主の長男として生を受けながら若くして画僧となり、雪舟を慕いながらも戦乱の時代を体感した異質の「風濤図」や「呂洞賓図」に見る嵐濤溢れる傑作を創造し、戯画も好みました。

京の光琳は異郷・江戸に旅して気迫と遊びの雪村画に出会い、意外な事に「呂洞賓図」を模写し画境を拓け、印章まで手に入れる凝り様でした。光琳に雪村の余韻を探ることは難事ですが、「紅白梅図屏風」の流水は異質な雪村画との出会いの結晶かもしれません。

与謝蕪村もまた若い頃数年間、異郷・結城近郊で画業修行し「蕪村」の雅号を得ていますが、ご当地で雪村の山水画に出会い感銘して「村」の字をいただいたのでは、とは私論ですが、晩年の蕪村の名画「夜色楼台図」や「鳶鳥図」は、雪村無くしては誕生し得なかったのではと思われます。異郷異質との遭遇もまた人生の大切な宝物と思うこの頃です。



雪舟「慧可断臂図」(1496)



雪村「呂洞貧図」(室町時代)



尾形光琳「紅白梅図屏風」(江戸時代前期)



与謝蕪村「鳶鳥図」(江戸中期)



与謝蕪村「夜色桜台図」（江戸中期）

立見榮男先生の最新作

私の最新作「河童風濤(雪村考)」は、当初、雪村の「呂洞賓図」を意識しながら取り組みましたが中々馴染まず、悪戦苦闘の中、気持ちだけでも戦国の荒波に対峙した雪村の気魄に近づきたいと主役を河童青年に切り替えて、荒々しい画面のまま遊び心も保ちながら筆を進めました。

転機は、茨城県立歴史館で今春開催された「雪村」展での三十三年振りの作品群との再会でした。

薄墨のやわらかで端正な描写と、濃墨の直感的で描写を超えた抽象的な強い線描に、雪村の神髄を見つけた時の高揚感でした。

（立見榮男）



立見榮男「河童風濤(雪村考)」(2025年)

以上